

横尾隆

腎臓病と闘う33万人を救う 未開の腎臓再生に光明灯す世界的研究者

文 高橋誠

Text by Mac Takahashi

・ 学校法人慈恵大学広報推進室長
・ 医療・健康コミュニケーター

2017年11月、東京慈恵会医科大学腎臓・高血圧内科横尾隆主任教授らの研究チームが世界で初めてラットで腎臓再生に成功し、英国の著名な学術誌「ネイチャー・コミュニケーションズ電子版」に論文が発表されました。「iPS細胞を用いた腎臓再生がヒト臨床に大きく近



明治大学農学部(川崎市)でクローン豚を検査する横尾医師(中央の青服)。左後方(黄色服)は長嶋比呂志明大農学部教授。農、工、獣医、知財など異分野のイノベーター達と共に世界的研究を志す。(撮影/西崎進也)

づく」と国内外で話題となつています。尿を作る「ろ過機能」を有する超複雑な構造体・腎臓は「最も再生が難しい臓器」と再生研究が敬遠されてきました。20年前から挑み続けた未開の腎臓再生の未来に光明が差し込みました。「ヒト臨床第1号は日本か、世界か?」

記者会見での質問に沈黙考した横尾医師。技術的にはほぼクリアでも、日本では、腎臓再生の過程における倫理面の議論、安全性の確保などのハードルがあります。日本と異なり治療を受けられず亡くなる患者が多い国々で国際貢献を先行し、国内世論の高まりをめざすほうが、より早く国内認可が実現するかもしれません。病と闘っている患者達の現実も脳裏に浮かんだのでしょうか。複雑な思いが交錯した様子がうかがえました。

最速で患者に届ける研究が原点
最新治療を待つ人々の期待に応えたい
かつて横尾医師が研究に行き詰まった

とき、異分野の協力者達と出会うことで、いくつもの活路が開けてきました。この「セレンディピティ」は、看取った患者の導き、必死に闘病している患者の希望の後押しとしか思えません。臨床の最前線では、患者の長期にわたる負担も、医療経済も限界に近い深刻な状態です。最速で患者に届けることが原点という横尾医師の研究は、腎臓病領域の諸問題をワー

ルドワイドで解決する可能性に満ちています。若い医師のリサーチマインドとグローバルイノベーションを鼓舞し、活躍の場を与え、女性医師を重用する合理的リーダーシップを発揮する横尾医師。「腎臓病と闘う国内33万人、透析や移植を受けられずに亡くなる世界230万人を救いたい」という途方もないゴールをめざし、難しい研究と日々の治療、日本で最も大きな腎臓内科の医局マネジメントに向かい合います。自らの使命を背負い、今日も早朝ランニングで体づくりりに励みます。



Profile

学校法人慈恵大学広報推進室長。医療・健康コミュニケーター。東京生まれ横浜育ち。慶応義塾大学経済学部卒。ミスノ広報宣伝部、リクルート広報企画部、米国SPBC社New Design Conceptor (LA在住12年)、仙生露Executive PR Adviser、富士1ばんゴルフ副支配人/経営企画室長/広報室長を経て、2004年より現職。日米複数企業における広報・マーケティング経験から、難解な医療・健康をわかりやすくメディア・社会に伝えるべく、病院広報担当者間の勉強会「病院広報研究会」を立ち上げ、医療・健康コミュニケーション活動を研究中。趣味はゴルフ(Hdcp9)、ワイン(日本ソムリエ協会ワインエキスパート#58)。